
大腸がん検診

大腸がん検診（便潜血検査）の実施成績

川崎成郎

東京都予防医学協会消化器診断部長

はじめに

東京都予防医学協会（以下、本会）では、1986（昭和61）年より便潜血検査による大腸がん検診を実施している。そして、1次検査で陽性となった精密検査対象者には大腸がん追跡調査用紙を配布し、受診した提携先医療機関またはそれ以外の医療機関より精密検査の結果を返信していただくという、追跡調査システムを実施している。なお本システムの対象者は職域検診、地域検診、人間ドックの受診者である。

便潜血検査は、抗ヒトヘモグロビン・マウスモノクローナル抗体を利用した金コロイド凝集反応で便中のヘモグロビンを測定する免疫比色法（富士フイルム和光純薬社）により、大腸内の出血の有無を調

べる方法である。

1日のみ採便する1日法と2日間採便する2日法があり、検査委託団体や健康保険組合との契約により異なる。また、検体は基本的には検診時に回収しているが、10月中旬～2月に実施する一部の事業所では郵送による回収も行っている。

本稿では、2020（令和2）年度の大腸がん検診の実施成績と結果について報告する。

受診者数と年齢分布

大腸がん検診総受診者数は男性33,750人、女性23,667人の計57,417人で、男女比は1.43：1と男性が多くなっている。男女比率を検診別にみると、男性は職域検診では63.7%、人間ドックでは65.9%で

表1 検診区分別・年齢別分布

検診区分	性別	年 齢 区 分							総計	男女比率 (%)
		～29歳	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80歳～		
職域	男性	396	2,860	8,157	9,980	4,360	591	77	26,421	(63.7)
	女性	471	1,839	5,595	5,001	1,818	296	38	15,058	(36.3)
	合計 (%)	867 (2.1)	4,699 (11.3)	13,752 (33.2)	14,981 (36.1)	6,178 (14.9)	887 (2.1)	115 (0.3)	41,479 (72.2)	
地域	男性		52	501	485	596	612	164	2,410	(28.4)
	女性		95	2,016	1,602	1,179	970	202	6,064	(71.6)
	合計 (%)		147 (1.7)	2,517 (29.7)	2,087 (24.6)	1,775 (20.9)	1,582 (18.7)	366 (4.3)	8,474 (14.8)	
人間ドック	男性	10	748	1,516	1,693	802	141	9	4,919	(65.9)
	女性	12	447	874	812	335	64	1	2,545	(34.1)
	合計 (%)	22 (0.3)	1,195 (16.0)	2,390 (32.0)	2,505 (33.6)	1,137 (15.2)	205 (2.7)	10 (0.1)	7,464 (13.0)	
全体	男性	406	3,660	10,174	12,158	5,758	1,344	250	33,750	(58.8)
	女性	483	2,381	8,485	7,415	3,332	1,330	241	23,667	(41.2)
	合計 (%)	889 (1.5)	6,041 (10.5)	18,659 (32.5)	19,573 (34.1)	9,090 (15.8)	2,674 (4.7)	491 (0.9)	57,417	

あるのに対し、地域検診では逆に女性が71.6%と多い傾向を示した。検診区分としては職域検診が41,479人(72.2%)、地域検診は8,474人(14.8%)、人間ドックは7,464人(13.0%)であり、コロナ禍でも職域・地域検診は2019年度に比べ1,000人以上の受診者の増加があった。

受診者数の年齢分布は、男性は2020年度も2019年度と同様に職域検診・人間ドックは50～59歳が最も多く、地域検診では70～79歳が最も多いという結果となった。次いで女性では職域検診・地域検診・人間ドックともに40～49歳が最も多いという結果であった(表1)。

受診者数の推移

検診区分別受診者数の推移を示した(図)。2019年度と比較すると、受診者数が全体で2,331人(4.23%)の増加にとどまった。これは人間ドックでの受診者数の減少が要因であると考えられる。

検診結果

職域検診での便潜血検査の要精検者数は2,678人、要精検率は6.46%で、精検受診者数は462人、精検受診率は17.3%であった。大腸

がん発見率は0.031% (男性10人、女性3人)で、陽性反応適中度は0.49%であった。

地域検診での便潜血検査の要精検者数は562人、要精検率は6.63%で、精検受診者数は214人、精検受診率は38.1%であった。大腸がん発見率は0.106% (男性4人、女性5人)で、陽性反応適中度は1.60%であった。

人間ドックでの便潜血検査の要精検者数は475人、要精検率は6.36%で、精検受診数は101人、精検

図 検診区分別受診者数の推移

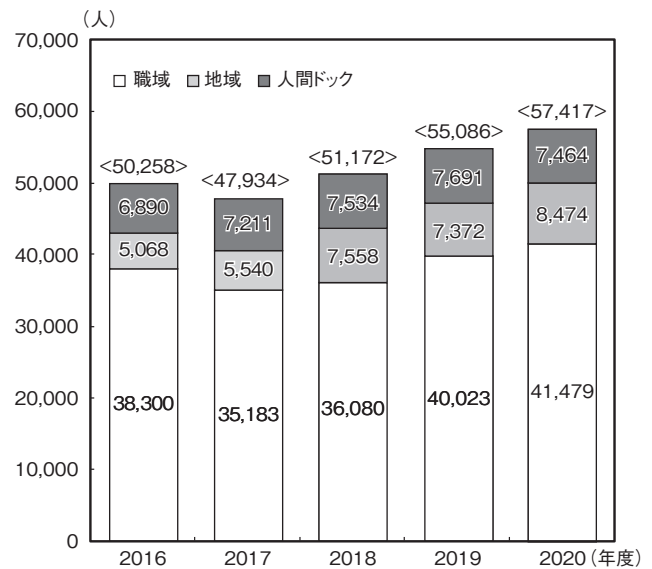


表2 検診結果

検診区分	性別	総受診者数	1次検診結果		精検受診者数	精検未把握者数	精密検査診断結果							大腸がん陽性反応適中度
			異常なし	要精検			大腸ポリープ	大腸憩室症	炎症性腸疾患	痔核	異常なし	その他	大腸がん	
職	男性	26,421	24,592	1,829	296	1,533	146	16	7	8	101	8	10	(0.49)
	女性	15,058	14,209	849	166	683	47	7	7	13	88	1	3	
域	合計	41,479	38,801	2,678	462	2,216	193	23	14	21	189	9	13	(0.031)
	(%)	(72.24)	(93.54)	(6.46)	(17.3)	(82.7)								(0.031)
地	男性	2,410	2,211	199	66	133	39	10	1	3	8	1	4	(1.60)
	女性	6,064	5,701	363	148	215	63	8	4	8	52	8	5	
域	合計	8,474	7,912	562	214	348	102	18	5	11	60	9	9	(0.106)
	(%)	(14.76)	(93.37)	(6.63)	(38.1)	(61.9)								(0.106)
人間ドック	男性	4,919	4,592	327	63	264	34	4	3	3	18	1	0	(0.00)
	女性	2,545	2,397	148	38	110	14	3	0	1	20	0	0	
計	合計	7,464	6,989	475	101	374	48	7	3	4	38	1	0	(0.000)
	(%)	(13.00)	(93.64)	(6.36)	(21.3)	(78.7)								(0.000)
総計	男性	33,750	31,395	2,355	425	1,930	219	30	11	14	127	10	14	(0.59)
	女性	23,667	22,307	1,360	352	1,008	124	18	11	22	160	9	8	
計	合計	57,417	53,702	3,715	777	2,938	343	48	22	36	287	19	22	(0.038)
	(%)	(93.53)	(6.47)	(20.9)	(79.1)									(0.038)

受診率は21.3%であった。大腸がん発見率は0%であった。

今回人間ドックでは受診者減少とともに精検受診率も低下している、また職域検診は受診者が増えているが、精検受診率は他の検診に比べ低いままである。

精検受診者777人の精検結果の内訳は、大腸がん以外では大腸ポリープが最も多く、次いで大腸憩室症、痔核、炎症性腸疾患の順であった。その他としては粘膜下腫瘍、クローン病などがあった(表2)。

発見された大腸がんの特徴

2020年度に発見された大腸がんは22人であり、内訳は男性14人、女性8人で男女比は1.75:1であった。

早期がんは15人(68.2%)、進行がんは7人(31.8%)であった(表3)。

大腸がん検診のまとめ

本会における2020年度の大腸がん検診受診者数は57,417人で、2019年度の55,086人から4.23%増加した。

要精検率は6.47%(2019年度6.77%)と許容値(7%)を下回り、要精検者数も減少した。精検受診率は20.9%と前年度の21.3%から大きな変化はなかった。精検受診者数は777人と、2019年度の793人から16人の減少がみられた。要精検率からみれば大腸がん検診に関する意識は向上しつつあるかもしれないが、依然として十分といえる受診者数では

表3 発見がんの特徴

(2020年度)		
	早期がん	進行がん
発見数	15人	7人
(組織型別)		
腺がん	12	7
不明	3	
(肉眼分類別)		
0-I p	4	
0-I s	1	
0-II a	1	
1型		
2型		4
不明	9	3
(深達度別)		
M	4	
SM	1	
MP		2
SS		
不明	10	5
(病期別)		
0期	9	
I期		2
II期		
III b期		
不明	6	5

ない。大腸がん検診に関するさらなる啓発が必要と思われる。

本会では大腸がん検診精検受診率の向上を目的に、2015(平成27)年4月から全大腸内視鏡検査を導入している。2020年度の要精検者数からみると、依然として十分な成果を上げているとは言い難い。今後は要精検者が確実に精検を受けるような受診勧奨方法の確立が最重要課題となる。精検受診率を改善するには、要精検者が強い認識を持てるような案内をより徹底することが必要である。